

令和 6 年度 年報



大阪府立上方演芸資料館／ワッハ上方

目 次

| | |
|--|----|
| 1 ごあいさつ | 1 |
| 2 「芸能」数珠つなぎ | |
| 寄稿 久堀 裕朗 | 2 |
| (運営懇話会委員、大阪公立大学大学院文学研究科教授) | |
| 3 上方演芸資料館運営状況（令和6年度） | 6 |
| 4 収蔵資料の紹介 | |
| 「初代桂文治の肖像画について」 萩田 清 | 17 |
| (運営懇話会資料整理・活用部会長、梅花女子大学名誉教授) | |
| 「花の家福奴・千代奴のレコード三種」 大西 秀紀 | 21 |
| (運営懇話会資料整理・活用部会委員、 京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター客員研究員) | |
| 5 収蔵資料の紹介（資料整理の現場から） | 25 |
| 6 上方演芸資料館（ワッハ上方）の経緯等 | 29 |

【表紙の写真】一心寺門前浪曲寄席チラシ



浪曲の人気は昭和50年代後半から平成にかけ、ベテラン浪曲師が亡くなったり引退したりして一気に衰退した。また、劇場での浪曲大会が減っていった。そんな中、浪曲関係者は寄席の再興に取り組み、平成6年7月に「毎月3日間ですが浪曲の寄席が出来ました」といううたい文句で、「一心寺門前浪曲寄席」が始まった。第2回出演者の京山福太郎は二代目京山幸枝若として、令和6年に浪曲界初の人間国宝に認定された。

「一心寺門前浪曲寄席」は令和6年7月に30周年を迎え、令和7年12月現在第378回となっている。

ごあいさつ

「上方演芸」は、京都・大阪を中心とする「上方」で、古くから多くの人々に愛され、親しまれてきた落語・漫才・講談・浪曲・諸芸といった大衆芸能です。

大阪府立上方演芸資料館（ワッハ上方）は、上方演芸の保存と振興に取り組み、親しむ場を提供することで、こうした大阪文化の発展につなげていくために、平成8年11月に設置されたもので、これまで国内外の多くの方々にお越しいただいております。

ワッハ上方の館内は、常設展示エリア、企画展示エリア、体験エリアなどに分けられており、常設展示エリアでは、上方演芸に欠かせない大阪弁の解説や、演芸の歴史に関する年表、歴史的価値のある公演ポスターをはじめとする貴重な収蔵資料の一部をご覧いただくことができます。

また、視聴ブースを設けており、在阪放送事業者から提供いただいた、テレビやラジオの貴重な演芸番組などもお楽しみいただけます。

企画展示エリアでは、本年が昭和元年から数えて100年目の節目にあたることから、『上方演芸で振り返る昭和レトロ展～演芸人たちが歩いた「昭和」～』と題した企画展を開催（R7.10.4～R8.3.8）しており、激動の昭和を生き、活躍した演芸人たちの足跡を昭和レトロの雰囲気を感じながらご覧いただくことができます。

加えて、高座を設置しており、羽織を着て演芸人に扮して記念撮影などができる体験の場としているほか、高座をそのまま舞台とし、演芸人による落語や講談、浪曲等のワークショップを定期的に開催するなど、来館者の皆様に楽しんでいただいております。

ワッハ上方の開館当初から続く主要事業の一つに、「上方演芸の殿堂入り」がございます。

この事業は、上方演芸の発展と振興に特に大きな役割を果たし、広く府民から愛され、親しまれ、後進の目標となる方を選定し表彰するもので、これまでに67組107名の方々が殿堂入りを果たしております。

今後とも、様々な取組みを通じ、大阪の伝統と誇りである上方演芸を広く発信し、上方演芸の保存と振興を進めるとともに、ワッハ上方が世代を超えた多くの方々に親しまれるよう、運営を行ってまいります。

結びに、関係者の皆様、この年報をお読みの皆様の日ごろからの大きなお力添えに深く感謝いたします。

ワッハ上方で、皆様のご来館を心よりお待ち申し上げております。

令和7年12月 館長 本田 吾郎

「芸能」数珠つなぎ

久堀裕朗

(運営懇話会委員)

(大阪公立大学大学院文学研究科教授)

「演芸」とは何か

本館のウェブサイトでは、「上方演芸資料館（愛称：ワッハ上方）は、『上方演芸の保存及び振興を図るとともに府民に上方演芸に親しむ場を提供し、大阪文化の発展に資する』という目的で、平成8年11月に設置された全国で唯一の演芸資料館です」と説明されている。唯一の「演芸」資料館であるという点は本館の誇るべき独自性であるが、この「演芸」という語は明治以降に用いられ始めた比較的新しい言葉であり、その指し示す範囲も時代によって変化してきたため、その点ではやや注意が必要である。

ウェブサイトでもこの変化について触れ、「『演芸』とは、大勢の人が気軽に楽しめる芸能で、かつては歌舞伎や映画なども含めましたが、今では落語・漫才・講談・浪曲といった大衆芸能を指します」と説明されている。つまり「演芸」という語は、当初は演劇・映画・歌舞音曲・寄席芸・曲芸・奇術など、より幅広い大衆的な娯楽全般を意味し、「芸能」に近い語義をもっていたが、やがて演劇・映画は含めなくなり、寄席芸中心の落語・漫才・講談・浪曲・諸芸（曲芸・奇術など）へと特化していったのである。ただし、「ワッハ上方」の愛称にも示されているように、「笑い」は「演芸」の主要な要素とみなされてきたため、演劇の中でも「笑い」を主体とする喜劇（曾我廻家劇から松竹新喜劇・吉本新喜劇に至る系譜）は「演芸」に含めて捉えられることが少なくないというのが現状であろう。

ここまで「演芸」の語義変化を確認したが、注意が必要であるとは言っても、上方演芸資料館が扱う「演芸」の範囲を再考した方がよいと言いたいわけではない。本館が「保存及び振興を図る」対象としては、ウェブサイトにも示されているように、落語・漫才・講談・浪曲・諸芸を中心に据えるのが適切であろう。ただ一方で、こうした狭義の「演芸」のそれぞれは、かつては大衆的な芸能全般（広義の「演芸」）の一部であり、それ以外の演劇・映画や他の芸能とも深い関わりを持って存在していた。そのことは忘れてはならないと思うのである。

例えば、落語・講談・浪曲は、狭義の「演芸」の枠を越え、当然ながら浄瑠璃や歌舞伎とも密接に結びついていた。また、現在では独立したジャンルとして捉えられがちな落語・講談・浪曲も、当時はそれぞれ相互に影響を与え合う芸能であった。したがって、「演芸」の「保存及び振興」を進めるにあたっては、こうしたジャンル横断的な関係性を意識することも重要であろう。そして、その意味においては、「ここまで演芸」「ここからは演芸ではない」といった線引きを意識する必要はないようと思われる。以下、こうした観点から、恐縮ではあるが、自身これまでの経験を少し紹介することにしたい。

さまざまな芸能との出会い

私の場合、子どもの頃から自然にさまざまな芸能に親しみ、いつの間にかその世界に引き込ま

れていった、というわけではない。テレビで漫才や吉本新喜劇などは楽しんで観ていたが、とりわけ「演芸」に強い関心を抱いていたわけでもなかった。多様な芸能に触れるようになったのは、主に大学在学中からである。その過程を少し振り返ってみたい。

「落語」を最初に意識したのは、大学入学前にさかのぼる。高校後半から浪人時代にかけての頃と記憶しているが、まず接したのは実演ではなく、興津要編『古典落語』(講談社文庫、全6巻)であった。巻数の付け方(上・下・続・続々・続々々・大尾)も印象的だったが、このシリーズを次々に読み進めるうちに、落語のストーリーや笑い話としての面白さを知った。当時は日本の近代小説を好んで読み、文学部への進学を目指していたが、純文学の深刻な小説とは異なり、気軽な読み物としてクスクス笑いながら楽しんでいたことを覚えている。

それが下地になったのかは定かでないが、大学入学後は実際の落語の実演にも興味を持つようになった。ただし落語だけを特に追いかけたわけではない。1回生の授業で西鶴の浮世草子を読んだことも一つの契機だったかもしれないが、江戸時代への関心が芽生えるとともに、京都での学生生活を通じて伝統的な行事に接する機会が増え、能・狂言・歌舞伎・文楽など伝統芸能全般の公演に少しずつ足を運ぶようになった。その流れで、京都市民寄席や学園祭の催しとして行われるプロの落語会にも出かけるようになった。

振り返れば、私の場合は話芸・語り芸という共通性から複数の芸能に惹かれていたのだと思う。一人で複数の登場人物を演じ分ける表現形式に面白さを感じ、落語から義太夫節、浪曲へと、数珠つなぎのように関心が広がった。文楽を初めて観たのは大学2回生の夏で、当初は人形よりも淨瑠璃(義太夫節)への関心が勝っていた。越路太夫・喜左衛門による「寺子屋」(『菅原伝授手習鑑』)のCDや、山城少掾・清六による「酒屋」(『艶容女舞衣』)のカセットを繰り返し聴き、語りの芸の面白さを徐々に理解し、深くのめり込むようになった。これが後に人形淨瑠璃文楽の研究を志すきっかけとなった。

浪曲については実演を聴く機会はなかったが、廣沢虎造(二代目)の「清水次郎長伝」のCDセットを買ったり、梅中軒鶯童の「紀伊国屋文左衛門」のCDを図書館で借りたりして楽しんだ。淨瑠璃や浪曲は音楽的な魅力があり、同じ録音を繰り返し聴くのに向いている。学生時代、限られた音源を繰り返し聴いたことは「芸」を理解する上でよい訓練になったと思う。現在はCDやYouTubeで大量の音源に触れられるが、その分一つの音源に集中して耳を傾ける機会が失われる弊害もあるのではなかろうか。少し脇道に逸れたが、こうして話芸・語りの芸を軸に、私は複数の芸能に親しんでいった。

さらに、それぞれの芸能の題材にも相互のつながりがあることに気づき、そのリンクをたどることで関心が一層深まった。たとえば当時の気に入りの落語「どうらんの幸助」は、喧嘩仲裁好きの男が義太夫の稽古屋で語られた淨瑠璃の内容を現実と勘違いして仲裁に出向く話である。淨瑠璃の演目は『桂川連理柵』帯屋の段で、その舞台は京都「柳馬場押小路虎石町の西側」に設定されている。学生時代、私は実際にその地を訪ねた。今風に言えば「聖地巡礼」である。もっとも目的はそれだけでなく、すぐ近くの大江能楽堂で能を観た後に周辺を散策したのである。

大江能楽堂は明治期の建物で、客席が畳敷きに座布団という古風な能楽堂であった。当時、ほとんど予備知識のないまま初めて訪れ、別世界に踏み込んだように感じた記憶がある(2001年の改修以前であるため、椅子席もなかった)。その体験の後に柳馬場押小路界隈を歩き回ったが、そ

うした「聖地巡礼」の際に当時携帯していたバイブルは桂米朝著『米朝ばなし 上方落語地図』(講談社文庫)であった。この本を片手に、京都だけでなく、大阪でも、落語・歌舞伎・浄瑠璃の「聖地」を実際にいくつか訪ね歩いたのである。

今でもこの文庫本は手元にある。久しぶりにページを繰ってみると、「茨住吉」(大阪市西区にある神社)の項目の部分に自分の字で「三年酒」と書き込んであるのを見つけた。この項目の解説文では、今では滅んでしまった人情噺「油屋与兵衛」が紹介されており、それに関連して作者の司馬芝叟のことが書かれているが、落語の「三年酒」については言及がない。すっかり忘れていたが、当時どこかでこの噺を知り、舞台に茨住吉神社が登場することに気づいて、心覚えに書き留めたのだろう。珍しい演目で滅多に口演されることではなく、『米朝落語全集』(創元社)の第1巻に収められているから、おそらくそれを読んで知ったのだと思う。

この『米朝落語全集』も落語やその周辺芸能への理解を一気に広げてくれる本だった。図書だけでなく、実家(大阪府泉佐野市にある)の近くの図書館でCDの『特選!! 米朝 落語全集』(全40集、東芝EMI)が揃っていたので、帰省するごとに順番に借り出して、すべてを聴いていった。別に勉強しようという動機からではなく、単に面白かっただけだが、その楽しみの中で、落語や歌舞伎・文楽の関わり、大阪・京都の土地の情報などを学んだ。そして、そうした知識を獲得することで、落語だけでなく、さまざまな芸能の楽しみも深まったのである。

大学の授業（大阪落語への招待）について

以上を踏まえ、現在勤務先で担当している授業について少し紹介したい。長年担当している授業の一つに「大阪落語への招待」がある。私はコーディネーター的な役割で、実際の授業は客員教授の桂春團治師・桂春雨師が中心となって進めてくださっている。学生向けの半期(全15回)の授業であるが、かつては一般受講者も募集していた。今年度で19年目を迎える。

この授業は、落語をほとんど知らない学生を文字通り「大阪落語」に「招待」するものである。毎回、基本的に春雨師に教室で一席実演していただき、学生はそれを聴くことで落語という芸能を理解していく。最終回近くには「寄席への招待」と題した本格的な落語会を設けており、春雨師に加え春團治師や梅團治師も落語を実演する(授業開設当初は三代目春團治師にもご出演いただいた)。こうして複数回の実演に接するうちに、学生は落語に慣れ、噺を聞く「呼吸」を身につけていく。その過程は、授業を横から見てもはっきりとわかる。落語そのものを理解してもらうことが、この授業の第一の目的である。

ただ、それだけにとどまらない点がこの授業の特徴もある。学生のコメントシートを取り上げながら、春團治師が師弟関係、大阪弁、大阪と東京の違い、さらには落語以外の芸能など、毎回多様な話を披露してくださる。何かを教えるという姿勢ではなく、一人の落語家の経験として語られるので、それを聴きながら、学生の関心も自然に広がっていく。

春雨師が取り上げる演目にも工夫がある。義太夫に関わる「豊竹屋」や「軒付け」、芝居噺として「蔵丁稚」が毎年取り上げられる。その際には、私も文楽や義太夫節、『仮名手本忠臣蔵』などを解説し、直後に聴く落語を理解する手助けをする。こうした機会を通じて、学生が浄瑠璃や歌舞伎そのものに興味を持つこともある。今年度の授業ではドイツ人の留学生が受講しており、こ

の授業を通じて文楽に関心を抱き、実際に国立文楽劇場に観に行ったと話してくれた。落語から他の芸能へと関心を広げてもらうことも、この授業の目的の一つである。

そのため期末レポートも、落語以外のテーマを扱うことを認めている。授業内容に関連があれば、必ずしも落語 자체を取り上げなくてもよい。本授業のキーワードは「芸」であり、人間の営みの中で培われてきた「芸」の伝承の価値を考える視点を持ってもらうことが、最終的な目標である。どのような切口からでも、学生が自らの体験を通じて「芸」について考えることができれば、この授業の目的は果たしたといえる。その中で、学生が落語から他の芸能へと関心を広げるようなことがあれば、なおよい。

もちろん、そんなに思い通りにはならない。しかし、中にはかつての自分のように、授業をきっかけに落語や文楽に親しむ学生もいる。学生時代には実際に観に行かなくても、何十年後かに改めて興味を持つこともあるだろう。そうした可能性にも期待しながら、私もこの授業を担当し続けている。

おわりに

以上の経験を踏まえると、「演芸」の振興にあたっては、複数の芸能を組み合わせた企画を立てるのも一つの方法ではないだろうか。

本資料館では、ワークショップや素人の落語会・講談会、学生落語会など、さまざまな充実した催しが行われているが、それぞれが独立しており、個別に完結している。こうした形が基本となるのは当然だが、時には、落語好きが浪曲に出会う機会や、落語研究会の学生がアマチュア講談師と交わる機会など、ある芸能に関心を持つ人が別の芸能に触れる機会を設けるのもよいだろう。このような機会がきっかけになって、興味の幅が広がるかもしれない。

あるいは、「演芸」の枠にとらわれず、現在ではふつう「演芸」に含めない女流義太夫を取り上げてもよいだろう。先に触れたように、関連する落語を紹介すれば、両方の芸能に関心を持つ人も出てくるかもしれない。

かつては複数の芸能に自然に接する環境が存在したが、現在はそうではない。落語ファンは落語の世界に、講談ファンは講談の世界にとどまりがちである。しかし、一つの芸能を楽しむ人は、他の芸能の潜在的な観客もある。「数珠つなぎ」のようにいくとは限らないが、個々の芸能の間に何らかの接点を設けることが重要ではないだろうか。このことを一つの提言したい。

上方演芸資料館運営状況（令和6年度）

■ 上方演芸資料館（ワッハ上方）入館者数・視聴ブースリクエスト件数〔月別推移〕

| 月 | 入館者数 | 開館日数 | 1日あたりの平均人数 | 視聴ブースリクエスト件数(月計) |
|-----|---------|------|------------|------------------|
| 4月 | 1,804人 | 25日 | 72 | 191件 |
| 5月 | 2,062人 | 27日 | 76 | 221件 |
| 6月 | 1,945人 | 26日 | 75 | 207件 |
| 7月 | 2,093人 | 26日 | 81 | 246件 |
| 8月 | 2,501人 | 27日 | 93 | 244件 |
| 9月 | 2,218人 | 25日 | 89 | 232件 |
| 10月 | 2,040人 | 27日 | 76 | 187件 |
| 11月 | 2,123人 | 26日 | 82 | 151件 |
| 12月 | 1,977人 | 24日 | 82 | 108件 |
| 1月 | 1,737人 | 24日 | 72 | 99件 |
| 2月 | 2,171人 | 24日 | 90 | 135件 |
| 3月 | 2,932人 | 26日 | 113 | 119件 |
| 合計 | 25,603人 | 307日 | 83 | 2,140件 |

〔休館日〕毎週月曜日（月曜日が祝日の場合は、翌平日が休館日）及び年末年始

〔過去3か年（令和3年度～令和5年度）〕

| 年度 | 入館者数 | 開館日数 | 1日あたりの平均人数 | 視聴ブースリクエスト件数(月計) |
|-------|---------|------|------------|------------------|
| R3 ※1 | 13,212人 | 258日 | 51人 | 2,182件 |
| R4 ※2 | 23,723人 | 308日 | 77人 | 3,100件 |
| R5 ※3 | 26,861人 | 308日 | 87人 | 2,955件 |

※1 令和3年4月25日から6月20日臨時休館(新型コロナウイルス感染拡大防止)
令和3年11月30日臨時休館（館内点検）

※2 令和4年9月19日13時から臨時休館（台風の影響）

※3 令和5年8月15日13時から臨時休館（台風の影響）

■ 上方演芸資料館運営懇話会 開催実績

2回開催（令和6年6月5日（水）、令和7年2月21日（金））

■ 上方演芸資料館運営懇話会 各部会 開催実績

・殿堂入り部会

2回開催（令和7年1月16日（木）、令和7年2月13日（木））

・資料整理・活用部会

12回開催（毎月1回開催）

・企画部会

2回開催（令和6年6月25日（火）、令和6年12月17日（火））

・放送資料部会

1回開催（令和7年2月28日（金））※書面開催

■ 研修会実施報告

資料整理・活用部会（資料整理に係る有識者会議）委員が、資料整理等に関するテーマの研修を実施（資料館職員が受講）

<実績>

| 開催日 | 部会等 | 研修内容 | 講師 |
|--------|------|--|-------|
| 4月9日 | 第1回 | 「砂川捨丸の『不如帰』」 | 大西委員 |
| 5月14日 | 第2回 | 「1970年代の上方落語界（第2回）」 | 荻田部会長 |
| 6月11日 | 第3回 | 「1970年代の上方落語界（第3回） -島之内寄席、橋ノ円都と阪大落研-」 | 荻田部会長 |
| 7月9日 | 第4回 | 「軽口について」 | 大西委員 |
| 8月20日 | 第5回 | 「浪曲の歴史（1） 祭文・歌祭文」 | 荻田部会長 |
| 9月10日 | 第6回 | 「浪曲の歴史（2） ちよんがれ」 | 荻田部会長 |
| 10月8日 | 第7回 | 「軽口のレコード その2」 | 大西委員 |
| 11月12日 | 第8回 | 「「ちよんがれ」から「浮かれ節」へ」 | 荻田部会長 |
| 12月10日 | 第9回 | 「浮かれ節から浪花節へ」 | 荻田部会長 |
| 1月21日 | 第10回 | 「浪花節全盛期～雲右衛門と奈良丸（上）～」 | 荻田部会長 |
| 2月18日 | 第11回 | 「浪曲の歴史を探る（6）浪花節全盛期 雲右衛門 と奈良丸（下の一）」 | 荻田部会長 |
| 3月11日 | 第12回 | 「尾張万歳について」 | 大西委員 |

■常設展示 開催実績

| 場 所 | 内容 | 展示風景 |
|---------|--|--|
| 常設展示エリア | <p>【テーマ・ねらい等】</p> <p>大阪弁の解説パネルや、歴史的価値のあるポスター展示のほか、映像音声視聴ブースを設置。上方演芸の歴史を知ることができるコーナー。</p> |     |

■企画展示 開催実績

| 場 所 | 内容 | 展示風景 |
|---------|---|--|
| 企画展示エリア | <p>【テーマ・ねらい等】 上半期「EXPOと漫才ブーム展～昭和・平成・令和の漫才師たち～」</p> <p>期間 令和6年3月15日～9月23日</p> <p>収蔵資料を活用し、上方演芸に親しんでいただける企画展を定期的に開催。 令和6年度上半期は、前回開催された大阪万博（EXPO '70）を振り返り、1970年代に起こった漫才ブームから、その後の漫才界の変遷をたどり、昭和から令和にかけて活躍した漫才師を紹介。</p> |     |

■企画展示 開催実績

| 場 所 | 内容 | 展示風景 |
|---------|--|--|
| 企画展示エリア | <p>【テーマ・ねらい等】 下半期「EXPOと上方演芸展～笑いの博覧会～」</p> <p>期間 令和6年10月4日～ 令和7年3月9日</p> <p>収蔵資料を活用し、上方演芸に親しんでいただける企画展を定期的に開催。 令和6年度下半期は、大阪・関西万博（EXPO2025）の開催が令和7年4月に迫る中、会場を「上方演芸の博覧会」に見立て、落語や漫才など、上方演芸の各ジャンルでこれまで活躍された演芸人や、今話題の演芸人を収蔵資料とともに紹介。</p> |     |

■上方演芸の殿堂入り特別展示 開催実績

| 場 所 | 内容 | 展示風景 |
|-------|--|---|
| 体験エリア | <p>【内容】 第 27 回上方演芸の殿堂入り演芸人の展示</p> <p>期間 令和 6 年 10 月 1 日～ 令和 7 年 9 月 30 日</p> <p>上方演芸の発展と振興に特に大きな役割を果たし、広く府民の皆様から愛され親しまれた方で、後進の目標となる演芸人を、「上方演芸の殿堂入り」として毎年表彰。</p> <p>第 27 回上方演芸の殿堂入りをされた、コメディ No.1 さん、正司敏江・玲児さんを収蔵資料とともに紹介。</p> |   |

■ 館内イベント開催実績 ※主催事業等

- ・体験型講習会（ワークショップ）及び専門家講演会

開催回数 40 回、参加者数 738 人

(開催期間：令和 6 年 4 月～令和 7 年 3 月)

- ・在阪放送局とのコラボイベント

「EXPO と漫才ブーム」～あの 70 年代！懐かしの上方漫才黄金期～

開催回数 1 回、参加者数 24 人

(開催日：令和 6 年 7 月 28 日)

- ・大学と連携したイベント

開催回数 4 回、参加者数 109 人

(開催期間：令和 6 年 10 月～令和 7 年 1 月)

<体験型講習会（ワークショップ）及び専門家講演会>

| 回数 | 開催日 | 内容 | 講師 | 参加人数 |
|----|--------|-------------------------------|---------|------|
| 1 | 4月20日 | 講談の魅力、楽しみ方 | 旭堂南也 | 19人 |
| 2 | | | | |
| 3 | 5月4日 | 浪曲の魅力、楽しみ方 | 三原麻衣 | 27人 |
| 4 | | | | |
| 5 | 5月18日 | 紙切り（諸芸）体験 | 笑福亭笑利 | 7人 |
| 6 | | | | |
| 7 | 6月1日 | 講談の魅力、楽しみ方 | 旭堂南照 | 25人 |
| 8 | | | | |
| 9 | 6月15日 | 上方演芸講演会（漫才の創り方） | 藤田曜 | 24人 |
| 10 | 7月6日 | 落語の魅力、楽しみ方 | 桂三歩 | 52人 |
| 11 | | | | |
| 12 | 7月20日 | 浪曲の魅力、楽しみ方 | 京山幸太 | 30人 |
| 13 | | | | |
| 14 | 8月3日 | ジャグリング（諸芸）体験 | 渡辺あきら | 17人 |
| 15 | | | | |
| 16 | 8月17日 | バルーンアート（諸芸）体験 | ゆっき～ | 53人 |
| 17 | | | | |
| 18 | 9月7日 | 落語の魅力、楽しみ方 | 桂三扇 | 40人 |
| 19 | | | | |
| 20 | 9月21日 | 講談の魅力、楽しみ方 | 旭堂南湖 | 23人 |
| 21 | | | | |
| 22 | 10月5日 | 腹話術（諸芸）体験 | 千田やすし | 56人 |
| 23 | | | | |
| 24 | 10月19日 | 落語の魅力、楽しみ方 | 笑福亭風喬 | 19人 |
| 25 | | | | |
| 26 | 11月2日 | 落語の魅力、楽しみ方 | 桂源太 | 36人 |
| 27 | | | | |
| 28 | 11月16日 | 浪曲の魅力、楽しみ方 | 真山隼人 | 35人 |
| 29 | | | | |
| 30 | 12月7日 | 上方演芸講演会 (演芸の舞台と観客～大笑いの効用～) | 井上宏 | 30人 |
| 31 | 12月21日 | 落語の魅力、楽しみ方 | 桂治門 | 39人 |
| 32 | | | | |
| 33 | 1月4日 | マジック（諸芸）体験 | Mr. オクチ | 60人 |
| 34 | | | | |
| 35 | 1月18日 | 落語の魅力、楽しみ方 | 笑福亭呂翔 | 42人 |
| 36 | | | | |
| 37 | 2月1日 | 上方演芸講演会（軽口のレコード） | 大西秀紀 | 16人 |
| 38 | 2月15日 | マジック（諸芸）体験 | キタノ大地 | 58人 |
| 39 | | | | |
| 40 | 3月1日 | 上方演芸講演会 (秋田實作「家」（一幕二場）の紹介) | 荻田清 | 30人 |

※ワークショップは2部制で実施

合計 738人

・アマチュア団体との事業連携 ※共催事業

開催回数 29回、参加者数 601人

(開催期間：令和6年4月～令和7年3月)

■ 新規登録資料（主なもの）

| | 資料種別 | ジャンル | 備考（資料概要） | 受入形態 |
|----|--------|------|---|------|
| 1 | 写真 | 漫才 | レツゴー三匹 写真パネル(角座) | 寄贈 |
| 2 | 写真 | 落語 | 初代 橘家 蔵之助 写真 | 寄贈 |
| 3 | 書籍 | 落語 | 初代 橘家 蔵之助 画集（自筆画） | 寄贈 |
| 4 | 書籍 | 演芸一般 | 雑誌『上方芸能』110冊 | 寄贈 |
| 5 | レコード | 漫才 | 軽口 主従(三銭返やせ)(上)(下) | 寄贈 |
| 6 | パンフレット | 浪曲 | 感謝!人間国宝 京山幸枝若独演会 大阪編 プログラム | 寄贈 |
| 7 | パンフレット | 浪曲 | 感謝!人間国宝 京山幸枝若独演会 大阪編 チケット | 寄贈 |
| 8 | 舞台 | 落語 | 桂あやめ 手作りアクセサリー (カラーワイヤー細工・透明ケース入り) | 寄贈 |
| 9 | 舞台 | 落語 | 桂あやめ襲名30周年・姉様キングス25周年変身 ホルダー(桂あやめのサイン入り) | 寄贈 |
| 10 | 舞台 | 漫才 | レツゴー三匹 表彰盾(第1回 NHK上方漫才コンテスト優秀賞) | 寄贈 |
| 11 | 舞台 | 漫才 | レツゴー三匹 表彰盾(第6回 上方漫才大賞 新人賞) | 寄贈 |
| 12 | 舞台 | 漫才 | レツゴー三匹 福笑い(レツ・ゴー三匹の福笑ひ) | 寄贈 |
| 13 | 舞台 | 漫才 | レツゴー長作 のれん(黄色) | 寄贈 |
| 14 | 舞台 | 漫才 | レツゴー長作 三味線 | 寄贈 |
| 15 | 舞台 | 漫才 | 生恵幸子 帯(光沢のある白色・青海波) | 寄贈 |
| 16 | 舞台 | 漫才 | 生恵幸子 帯(薄緑地・人物柄) | 寄贈 |
| 17 | 舞台 | 漫才 | 生恵幸子 着物(紫色(地模様あり)・姫柄) | 寄贈 |
| 18 | 舞台 | 漫才 | 生恵幸子 着物(濃紺地・金と白の鶴柄) | 寄贈 |
| 19 | 舞台 | 漫才 | M-1 2006 ファンクラブ限定カレンダー | 寄贈 |
| 20 | 舞台 | 漫才 | M-1 ケータイクリーナー | 寄贈 |
| 21 | 舞台 | 漫才 | M-1 優勝ストラップ | 寄贈 |
| 22 | 舞台 | 漫才 | M-1 グランプリ2008 メモ帳 | 寄贈 |
| 23 | 舞台 | 漫才 | M-1 グランプリ2010 ノート | 寄贈 |
| 24 | 舞台 | 漫才 | M-1 グランプリ審査員ノート | 寄贈 |
| 25 | 舞台 | 漫才 | マンスリーよしもと ストラップ | 寄贈 |

上方演芸の殿堂入り

上方演芸は大阪の誇るべき文化としていつの時代も人々に愛され、受け継がれてきました。それぞれの時代に光り輝き、大勢の観客を楽しませた演芸人があまたおられます。

上方演芸資料館では、平成8年度から、「上方演芸の発展と振興に特に大きな役割を果たし、広く府民の皆様から愛され親しまれた方で、後進の目標となる方」を対象に選考し、「上方演芸の殿堂入り」を決定しています。令和5年度（第27回）までに落語・浪曲・講談・漫才・漫談・コメディアンなど65組104名の方々が受賞されました。

令和6年度（第28回）は、二代目桂ざこばさん、横山たかし・ひろしさんが受賞され、表彰式は、令和7年7月1日にシティプラザ大阪で開催しました。



二代目桂ざこば

横山たかし・ひろし

(画) イラストレーター 成瀬 國晴 氏

「上方演芸の殿堂入り」一覧表

| | |
|--------------|--|
| 第1回（平成8年度） | 初代桂春団治、五代目笑福亭松鶴、横山エンタツ・花菱アチャコ、砂川捨丸・中村春代、二代目旭堂南陵、三代目吉田奈良丸 |
| 第2回（平成9年度） | ミスワカナ・玉松一郎、中田ダイマル・中田ラケット、花月亭九里丸 |
| 第3回（平成10年度） | 六代目笑福亭松鶴、芦乃家雁玉・林田十郎、梅中軒鶯童 |
| 第4回（平成11年度） | 二代目桂春団治、松葉家奴・二代目松葉家喜久奴、初代京山幸枝若 |
| 第5回（平成12年度） | 四代目桂米団治、松鶴家光晴・浮世亭夢若、西条凡児 |
| 第6回（平成13年度） | 二代目桂枝雀、浪花家市松・浪花家芳子、富士月子 |
| 第7回（平成14年度） | 橋ノ円都、桜川末子・二代目松鶴家千代八、吾妻ひな子 |
| 第8回（平成15年度） | 都家文雄・都家静代、林家とみ |
| 第9回（平成16年度） | 夢路いとし・喜味こいし、横山やすし・西川きよし |
| 第10回（平成17年度） | 三代目林家染丸、五代目桂文枝、海原お浜・海原小浜、宮川左近ショー |
| 第11回（平成18年度） | ミヤコ蝶々・南都雄二、人生幸朗・生恵幸子、三代目旭堂南陵 |
| 第12回（平成19年度） | ミスワカサ・島ひろし、島田洋之介・今喜多代、京唄子・鳳啓助 |
| 第13回（平成20年度） | 横山ホットブラザーズ、暁伸・ミスハワイ |
| 第14回（平成22年度） | 三代目桂米朝 |
| 第15回（平成23年度） | 二代目露の五郎兵衛、若井はんじ・若井けんじ |
| 第16回（平成24年度） | 上方柳次・上方柳太、岡八郎（コメディアンとして） |
| 第17回（平成25年度） | 川上のぼる、木川かえる |
| 第18回（平成26年度） | 二代目平和ラッパ、タイヘイトリオ |
| 第19回（平成27年度） | 秋田Aスケ・秋田Bスケ、花紀京（コメディアン） |
| 第20回（平成28年度） | 三代目桂春団治、二代目春野百合子 |
| 第21回（平成29年度） | かしまし娘 |
| 第22回（平成30年度） | レツゴー三匹、三遊亭小円・木村栄子 |
| 第23回（令和元年度） | 笑福亭松之助、Wヤング |
| 第24回（令和2年度） | ゼンジー北京 |
| 第25回（令和3年度） | 笑福亭仁鶴、初代 真山一郎 |

| | |
|-------------|-------------------|
| 第26回（令和4年度） | 桂吉朝、今いくよ・くるよ |
| 第27回（令和5年度） | コメディ No.1、正司敏江・玲児 |
| 第28回（令和6年度） | 二代目桂ざこば、横山たかし・ひろし |

※平成8年度～令和6年度：67組107名

収蔵資料の紹介

初代桂文治の肖像画について

荻田 清

(資料整理・活用部会長)

(梅花女子大学名誉教授)



「元祖桂文治」の舞台図

昨年発行の『令和5年度 年報』の表紙の図版には、当館所蔵の『大寄嘶の尻馬』がとりあげられた。その第一冊目、色摺口絵の「元祖桂文治」の舞台姿がひときわ目をひく。初代文治は、いう迄もなく現在も東西で活躍する「桂」を名乗る落語家の祖である。この『大寄嘶の尻馬』は個人で所蔵されている方も多く、比較的よく知られた本である。今日では『伝承文学資料集成 14 近世咄本集』(岡雅彦編著)に全文が翻刻されており、詳しい解説、考証も付けられている。岡氏の解説をふまえながら、簡単に紹介しておこう。

『大寄嘶の尻馬』には、半紙本三冊と小本五冊とがあるが、当館所蔵は半紙本。ゆえに、ここでは半紙本に限定して話をすすめる。本文と同じ薄い紙に絵を入れた表紙を含めて、わずか2丁（紙2枚、4頁）ほどの小冊子を、初編は28冊、二編は29冊、三編は26冊集めた寄せ本である（注①）。内容は落ちのついた小咄もあるが、「○○尽くし」といった言葉遊びの笑いを狙った戯文が多い。「御文章」「行者真言」「○○経」などの、宗教的な文章や寺子屋の教科書ともいえる往来物、奉行所へ訴える願書など、本来まじめな文章を口合（駄洒落、地口）でしゃれのめすものが多数を占める。作者は、初代桂文治をはじめ、立田土瓶、十篇舎一九（注②）、呑龍軒、浪花梅翁などの名が見える（注③）。

こうした小冊子は古くから出版されていた。淨瑠璃の抜本や歌祭文なども本の体裁は同じといえよう（注④）。それらを寄せ集めて、厚紙の表紙や色摺の口絵と目次をつけて出版したものである。集めて本として出したのはいつか。ふつう本の奥付に刊年が記されるものであるが、本書にはない。そこで内容から推定することになる。初代桂文治は文化十三年（1816）没であり、立田土瓶や呑龍の活躍期から考えて、文化年間の出版物も含まれていると考えられる。しかし、浪花梅翁作の「新板御ざしきおとしばなし」（初編2冊目）の最初の嘶の文中に「天保と年号がかはつた」とあることから、集められたのは天保以降と考えざるをえない。



「淨るり太夫 名まへづくし 桂文治作」



江戸十編舎一九作

「奉公人請状之事・新酒手形之事」

岡氏の考証につけ加えるならば、口絵を描いた初代長谷川貞信は文化六年(1809)生まれで、作画期は天保五年(1834)からとされており(『浮世絵大百科事典』)、幅をもたせて天保年間の刊行と見ておきたい(注⑤)。

さて、この書の貞信画の文治の舞台図を改めて見てみよう。その際、注意しなければならないのは、文治没後十数年に描かれたもので、文化末の舞台を描いたというより、天保期の舞台と見た方がいいように思う。安直な小屋などではなく本格的な建築の寄席と見え、太い松の幹を描いたりっぱな衝立を背に、緋毛氈の上に演者文治が座る。上手に燭台、下手に蓋つきの湯 飲みが置かれる。前には木目鮮やかな書見台があり(まな板型の現在の見台とは異なる)、紋付の羽織・袴の演者が扇子を開いて聴衆に話しかけている。

扇子には朝日の富士が描かれ、羽織と湯飲みには「文」を図案化した紋が見える。文治の顔を見ると、半開きの唇、二重瞼、上目づかい。月代は青黛を塗っているのか青々としており、耳から頬にかけても青く塗られている。上方の錦絵は、「顔似せ」と呼ばれたように、江戸よりも写実的な特徴をもっている(注⑥)。すると、もみあげから頬にかけての青さは何を意味するのか。絵師貞信は文化六年、大阪南船場安堂寺町浪花橋筋茶巾袱紗商に生まれたという(注⑦)。文治の没した文化十三年は数え年8歳。座摩神社や法善寺境内で活躍する生前の文治を見た可能性は十分にある。髭剃り跡の青々とした顔は、幼い貞信に強烈な印象を与えたのではなかろうか。

文治の舞台図は、現在3点が知られている。一つがこの『大寄嘶の尻馬』、今一つは『藝能懇話』創刊号巻頭に肥田皓三氏が紹介された絵入の興行番付。「石橋」を演じている舞台図で、芝居嘶を得意とした演者の様が髪髾としている。ただ、絵師名はなく、似顔になっているかどうかは疑問、肖像としては除外するのが無難であろう(注⑧)。



(左) 岩波文庫本



(右) 「大阪落語」

今一つが咄本『臍の宿替』(文化九年刊)巻五の巻末に描かれた「新咄 我まゝ草紙 全部三冊」の出版広告。ここに文治が見台を前にして口上を述べている図が載っている。この本の挿絵は当時の絵師として著名な浅山芦国。役者の似顔絵などを得意とした人の図だけに、文治の

似顔絵として重宝されている。この図は肥田皓三氏が「大阪落語」(注⑨)の中で紹介された。その後多くの書が文治の肖像として引用している。『古今東西 落語家事典』もこの図版から引用したと思われる。

武藤禎夫氏の『化政期 落語本集』(岩波文庫、1988年)に『臍の宿替』が翻刻、注釈つきで収載された。その文治の図を見ると、左耳の下に意味不明の波線が見えて、「大阪落語」の肖像と微妙な差が見られる。『上方落語図録』(注⑩)所収の図版は、「大阪落語」と同じく、耳の下はすっきりしている。

ここで、大阪府立中之島図書館蔵の図を掲出する。この図は墨版と薄墨版の二版で摺られており、月代、もみあげ、顎、鼻の下に薄墨が入れられている。左耳の下には岩波文庫本に見られた波線もはっきり見える。「大阪落語」中の図は印刷の都合で薄墨の部分が飛んでしまったものか(注意深く見ると、うっすらと見えるが)、あるいは薄墨の版を省略した後摺の版があったものか。ともかく、文治の肖像としては薄墨で髭剃り跡をくっきり出したものが本来のものであろう。ともすれば、貞信の図は

のちに描かれた肖像として、信ぴょう性が低かったが、逆に特徴をよくとらえた図として評価してよいのではないかと思う。

そう考える根拠をもう一つ示しておこう。「風流見立競」という一枚摺^(注⑪)に、「中山来助いつでも台詞ごとにつや付て 狂言の地合 咄も どつとした跳ね(受け)がないとて あつたら(惜しい)男の 桂文治」とある。これは当時の歌舞伎役者と市中で名高い芸人を対にして、二人に共通する批評を加えた、一種の戯作、戯文である。文治の穴(欠点)を探し出して茶化そうとしたものである。芝居咄を得意として今をときめく人気者ではあるが、普通のセリフも芝居がかつて、大きな笑いにはならず、惜しい男の桂文治である、と解釈してみた^(注⑫)。「惜しい男の桂文治」には、「桂男」ということばがあるように、優美な男性を思い浮かべる^(注⑬)。が、舞台の文治はそうは見えない、惜しい男であるという意味ではないか。髭の濃い文治の顔からは「桂男」は想像しにくいということを言っているのではないかと思うのである。笑いを求める芸人としては、自分の顔の欠点を逆手にとって、「桂」を名乗ったのではないかとさえ思うのである。

補注

- ① 厳密にいうと、初編には3丁のものが4点、二編には3丁のものが1点、三編には3丁のものが4点、4丁のものが1点含まれる。
- ② 一九の表記は微妙に変わっている。江戸十編舎一九、江戸十遍舎一九、江戸十篇舎一九、江戸十返舎一九、東都十遍舎一九、東都十篇舎一九。『道中膝栗毛』で知られる一九と同一人とみられるが、本屋の策略とも考えられる。
- ③ 文治6点、土瓶8点、一九10点、梅翁9点。土瓶・文治共作1点。土瓶は『上方落語の歴史』口絵図版「素人はなし見立角力」東方前頭七枚目「てんま 土瓶」、「浪花素人 はなし見立角力」では行司の位置に大きく名が出ている。呑龍はおどけ開帳で有名な人。『摂陽奇観』文政五年(1822)「同月(三月か)難波新地ニ而 嵐璃寛おどけ開長 土瓶亭 同呑龍亭」などの資料あり。浪花梅翁は他の資料を知らない。ここに出る文治が初代であることは、岡氏の解説に詳しい。



大阪府立中之島図書館蔵『臍の宿替』

- ④ 抜著『上方落語 流行唄の時代』第三章の中の「抜本、薄物正本との関係」の項を参照されたい。『摂陽奇館』宝暦六年の項に載る「いろは歌／名よせ 義臣伝」(2丁半?)も同種の小冊子であろう。
- ⑤ 『初代長谷川貞信版画作品一覧』(1997年、和泉書院、松平進編)の解説によれば、「長谷川貞信」の名の錦絵は天保七年からのものが確認されているが、それ以前、文政六(1823)年から「浪花亭貞信」の名で画を出しているという。江戸の十返舎一九の没年(天保二年 1831)にあまり遠くない時期とも考えられ、広く幅を持たせて、天保年間とせざるをえないと思う。
- ⑥ 松平進『上方浮世絵の再発見』(講談社)の序文には江戸の錦絵と比較して「上方はあけすけに写実的に描く」という。
- ⑦ 松平進編『初代長谷川貞信版画作品一覧』(和泉書院、1997年)の「初代長谷川貞信の生涯と作品」。その中に天保11年の「浪花諸芸 玉づくし」には「似兒画ノ 重春 貞升 貞廣 貞信」と出てくる。この「玉づくし」は上方落語の歴史研究において、しばしば使用されてきた資料でもある。
- ⑧ 歌舞伎の絵づくし(上演のあらすじを描いた絵本)では、役者の似顔にはなっていない。江戸にならって出版された、上方版の絵入りの顔見世番付も、役柄の特徴を掴んだ略画といった感じで、似顔絵とは言えないよう思う。
- ⑨ 『日本の古典芸能 9 寄席』(平凡社、昭和46年)所収。
- ⑩ 『上方落語図録』(大阪藝能懇話会、肥田皓三監修、豊田善敬・樋口保美編、令和3年)
- ⑪ 『藝能史研究』240号(2023年1月)の拙稿「当世役者／浮世芸者 風流見立競」について 一寛政後期上方の諸芸能一。
- ⑫ 前田勇著『上方落語の歴史』(杉本書店、昭和33年)がこの一枚摺に触れている。が、「文治に対する評はあまりかんばしいとは言えない」ために、踏み込んだ解釈はしていない。改定増補版(昭和41年)でも同じ。
- ⑬ 『角川 古語大辞典』に「①月の世界に住む男」から「②転じて、容姿の美しい男をいう。美男」として、「出世景清」「梅暦」の用例をあげる。『御伽草子』の「淨瑠璃十二段草紙」の七段にも「御曹司聞しめし、月に住む桂男に誘はれて………」とある。

収蔵資料の紹介

花の家福奴・千代奴のレコード三種

大西 秀紀

(資料整理・活用部会委員)

(京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター客員研究員)

演芸のジャンルで最初にレコード化されたものは落語、声色、浪花節などで、漫才が本格的にレコードになるのは、レコードカタログに砂川捨丸が登場する大正中期ごろである。やがて漫才レコードは、特に関西のレコード各社における重要な商品となった。当館も数多くの漫才レコードを所蔵するが、本稿ではそれの中から花の家福奴・千代奴の内外レコード三種をご紹介したい。

1 貝印内外レコード

貝印内外レコードは大正 13 (1924) 年 8 月に兵庫県武庫郡今津町に設立された合資会社内外蓄音器商会（以下・内外蓄）のレーベルである。代表社員の森垣二郎(1884–1966)は兵庫県豊岡出身⁽¹⁾。大正 5(1916)年に株式会社日本蓄音器商会（以下・日蓄）に入社してレコードの制作現場に携わり、8 年間レコーディングディレクターを勤めた後に日蓄を退社。大正 13(1924)年に地元の兵庫県に、神戸市内で石油商を営んでいた甥の松田文蔵⁽²⁾とともに内外蓄を立ち上げた。この頃関西発のレーベルには、日蓄京都工場のラクダ印オリエントレコードや新興の日東蓄音器のツバメ印ニットーレコードの大手に加え、酒井公声堂の蝶印バタフライレコードや東亜蓄音器のハト印トーアレコードなどの中堅レーベルがあり、名古屋には大和蓄音器商会のツル印アサヒレコードがあった。こういった時期に森垣がレコード業界に参入したのには、日蓄で培った経験に基づく自信と勝算があったものと思われる。

2 内外の漫才レコード

内外レコードのレパートリーは浪花節や俚謡や端唄小唄、漫才や書生節といった庶民向きの娛樂性の強いものが中心で、高尚なものはごく少数である。また喜劇、喜歌劇、児童劇、管絃楽なども内外レコードの大きな柱である。昭和 2(1927)年 2 月発行の同社の一枚刷り総目録を見ると、漫才に関しては花の家福奴・千代奴、花菱アチャコ・花井正壽、玉子家円辰・太刀村一夫、五條家牛若・後藤豊子、浮世亭夢丸・秋月明月、河内家楽春・久春、砂川捨市・玉子家志乃武、竹廻家小蝶・小奴、ニコニコ会一行、竹の家喜雀・ます奴といったコンビの名前が並ぶ。この中で特筆に値するのは、上方漫才中興の祖といわれる玉子家円辰が「御殿萬歳」「阿呆陀羅經貝尽/法界節」の 2 枚を残していることで、円辰の録音は他社にはないため、演芸史研究の上でもとりわけ貴重である。また花菱アチャコの相方の花井正壽は後の千歳家今男である⁽³⁾。アチャコのレコードは横山エンタツ（前記、玉子家円辰とは別人）とのコンビで昭和 7(1932) 年からニットーレコードに残した多くの録音が有名で、コンビ解散後に千歳家今男と組んで録音を残すが、すでに大

正期にこのコンビの録音が存在したのは興味深い。SP レコードの当時の売れ行きを判断するには、現在 SP レコードが流通する場所（古道具屋やインターネットオークション等）でそのレコードを見かけるかどうかというのがひとつの目安になるが、筆者の経験では内外の漫才レコードをみることは少ない。したがって当時の売れ行きは芳しくなかったといえるのではないだろうか。

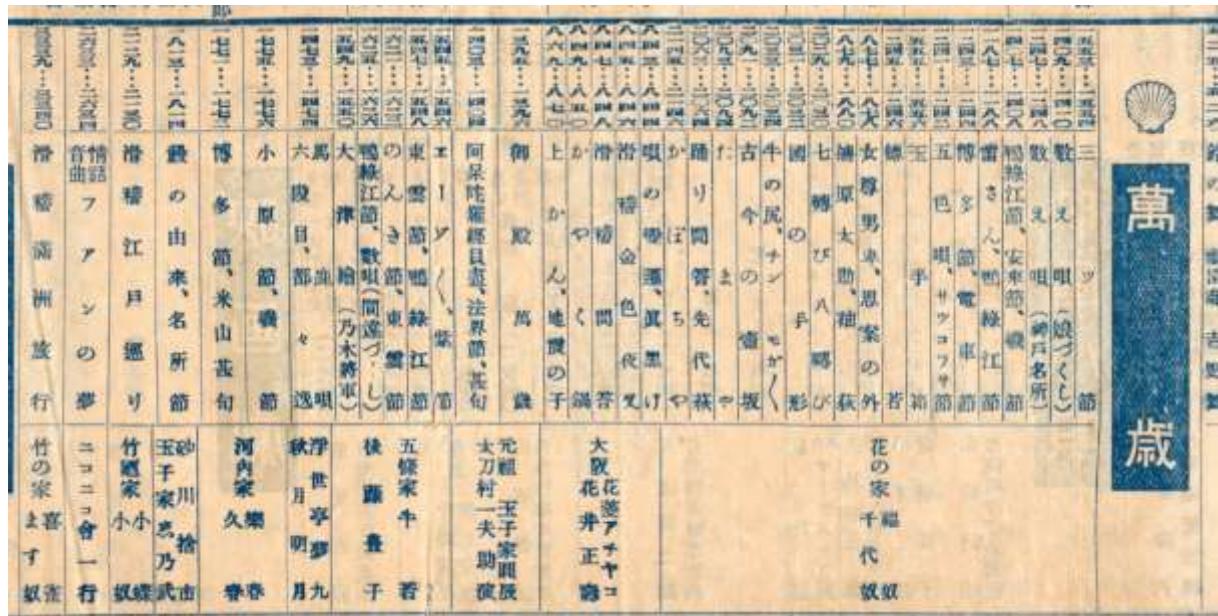


図1 貝印内外レコード昭和2年2月版一枚刷総目録の漫才の項（個人蔵）

3 花の家福奴・千代奴のレコード

一般に漫才師それも戦前に活動した人たちの経歴や活動期間等の情報を得るのは非常に難しい。同じ演芸でも落語の場合、噺家の東西を問わずその情報はかなり整理・公開されている。しかし漫才に関してはごく限られた人気者以外、芸名は知られていても、具体的な経歴などは知るすべもないのが現状である⁽⁴⁾。今回取り上げた花の家福奴・千代奴も例外ではなく、内外蓄からレコードが出ていたこと以外は何も分かっていない。

ただ前述の内外レコードの一枚刷り総目録には計 37 枚の漫才レコードが掲載されているが、花の家福奴・千代奴のレコードは 18 枚あり、全体の約半数を占めている。このことはこの総目録当時、福奴・千代奴のコンビが人気者で、内外蓄の期待を背負っていたことの何よりの証しだろう。数が違いすぎるので比較にはならないが、同じ時期に最も多くの漫才レコードの品数を揃えていた、オリエントレコードにおける砂川捨丸のような位置付けといえなくもない。

内外の漫才レコードは現代ではいずれも稀覯盤で、当館所蔵のものは残念ながら福奴・千代奴の次の 3 枚のみである。

1) 数え唄（神戸名所）上・下

レコード番号 1247/1248 (1925 年発売、資料コード : 00134015)

福奴・千代奴は女性のコンビである。三味線、鳴物が入るが、当人達の演奏がどうかは分からぬ。内容は彼氏を想う女性の心情を、一から十までの数え唄に詠み込んだもの。表題に「神戸名所」とあるが、「へ一つとせいゝえ、広い又神戸名所でただ一人、あなたの姿に私や摩耶山で、親の意見も糠や豆腐の春日野道じやわいな⁽⁵⁾」というように、神戸各所の地名を語呂合わせで入れ込んでいる。二番以降には、青谷温泉、布引の滝、北野の三本松、三角帳場、生田の森、三宮、居留地、南京町、元町鯉川、金玉寺（神社か？）、諏訪山公園、常磐花壇、諏訪山稻荷、錨山、県庁路、神港俱楽部、善福寺、祥福寺、宇治川ふろん谷、安養寺山、五郎十郎池、神戸ステーション、湊川、福原、有馬道、小港、川崎造船所などの地名が使われている。他府県民にはピンとこない場所も多いが、このネタを聞く限りでは、福奴・千代奴は神戸の寄席を拠点に活動したコンビではないだろうか。

2) 数え唄(娘づくし) 上・下

レコード番号 1409/1410 (1926年発売、資料コード: 00067629)

1) と同じメロディーの数え唄だが、こちらは「娘づくし」とあるように、さまざまな商家の娘の好色ぶりを一から十までの数え唄に詠み込んだもの。「へああ、一つとせいゝえ、人もまた嫌がる八百屋のどつ助平えゝ」という歌詞からも分かるとおり、下ネタの数え唄である。八百屋の娘は都合三回唄われるが、それ以外に船方屋、すし屋、鋳掛屋、桶屋、材木屋、米屋、とつみ屋？（詳しく聞き取れず）の娘達が詠まれている。この数え唄は当時の小屋で大いにウケたのではないだろうか。評論家の吉田留三郎は自著の中で明治後期ごろの萬歳小屋について次のように書いている。



図2 数え唄(娘づくし) 内外 1409

大阪府立上方演芸資料館蔵

当時の萬歳小屋といふものは董簾張

の小屋の兄貴分くらいに思われていたもので、中でやることも野卑、尾籠、今でいえば場末のストリップ小屋を思わせるような猥雑なものであった。（吉田留三郎『まんざい風雲録』九藝出版、1978, p.130）

このレコードは、猥雑な要素をできるだけ排除して、高級漫才を標榜した砂川捨丸のレコードとは一線を画すが、逆に当時の高級ではない漫才のスタイルを知ることができる貴重な資料といえる。

3) 玉手箱 上・下

レコード番号 1555/1556 (1926 年 2 月発売、資料コード : 00618892)

掛け合いの中に、俚謡や書生節などの流行唄を挟んだものである。当市井でどのような唄が流行っていたかが分かる一枚で、レコードの表面は次のような掛け合いで始まる。

「サア、何ぞひとつやらしてもらいましょうか」「サア、お陽気にやってください」「どうしてもこの世の中は唄に限りますな」「唄はよろしおまんなア」「また、唄もだんだん改良の世の中でなア」「なるほど」「これはどうです、安来節いうのがよう流行ってますなア」「よう流行りましたなア」「考えてみると、みな名物もんになってますワ」「さよか?」「この、出雲では名物の安来節ね」「ハア」「伊勢では伊勢節」「なるほど」「伊予では伊予節」「ハア」「博多行ってみなはれ、博多節ちゅうよって」「ハアハア」「それからアンタ土佐行ってみなはれ、アンタ、鰐節ちゅうのがりまんがな」「あれは魚（うお）ですがな」「アッ、あれ唄と違いますか?」「違う／＼」「わて又唄かしらんと思いました」「あほらしい」「それからアンタ、越中富山の名物で小原節、面白いのんがおまっせ」「ハア、そんな面白おまっか?」「この頃アレが流行って来てまんねん」「さよか」「あの唄聴いてますとナア、甘みがあって味があつて色氣があってナア」「フウン」「何と無しによろしいで」「そうですか」

このようなやり取りの後、小原節とスットントン節を唄い表面は終わる。裏面も同じような展開だが、こちらでは磯節、籠の鳥、関の五本松を唄っている。唄のレパートリーの豊富さが、彼女たちの芸達者振りを窺えて興味深い。

素性の分からぬ漫才師のレコードだが、盤面に針を下ろせば、100 年前の福奴・千代奴の荒削りだが活気のある舞台姿が浮かび上がる。それは紙資料やマイクロフィルムからは得られない、音声資料の有り難さである。ちなみに内外蓄は昭和 5(1930)年に解散し、その事業を継承するかたちで太平蓄音器株式会社が同時期に設立された。そのレベルのタイヘイレコードには、内外レコードと同様に、数多くの演芸レコードが含まれている。

【註】

1. 「明治は生きている 森垣二郎」『音楽の友』第 22 卷 11 月号、音楽之友社、1964, pp.154-157
2. 『人事興信録第 11 版 下』1937、人事興信所、p.ま 130
3. 岡田則夫「続・蒐集奇譚 14」『レコード・コレクターズ 9 月号』レコード・コレクターズ社、1991, pp.92-93
4. ただ近年、大正・昭和期の漫才師についての調査研究は進みつつある。その好例として、喜利彦山人 Web サイト『上方まんざいのすべて（仮）』<https://kamigata-manzai-shi.com/> 花の家福奴・千代奴についてはまだ記載がないが、今後の調査に期待したい。
5. 岡田則夫編『特選上方漫才 SP レコード文句集成』日外アソシエーツ、2024, pp.285-286

収蔵資料の紹介（資料整理の現場から）

S P レコード歌詞カードにみる「まんざい」の表記

島田 智子（上方演芸資料館司書）

「萬歳」から「漫才」へ——時代と共に変化を続ける「まんざい」には、さまざまな表記が用いられてきた。ここでは当館所蔵の S P レコード歌詞カード（文句カード）にみられる漢字表記を紹介する。発売時期は主に倉田喜弘著・国立劇場芸能調査室編『演芸レコード発売目録（演芸資料選書 4）』（国立劇場、1990）により、78MUSIC (<http://78music.jp/index.html>) も参照した。

1. 【万歳】

砂川捨次・荒川歌江「薄情男・薄情女」

(ニットー 3889) [資料コード 00200618]

発売時期：昭和 5 年 3 月

捨次は次の【万才】で紹介する砂川捨丸の弟子⁽¹⁾。
歌江は荒川芳丸一門で、夢路いとし・喜味こいしの
姉弟子にあたる。



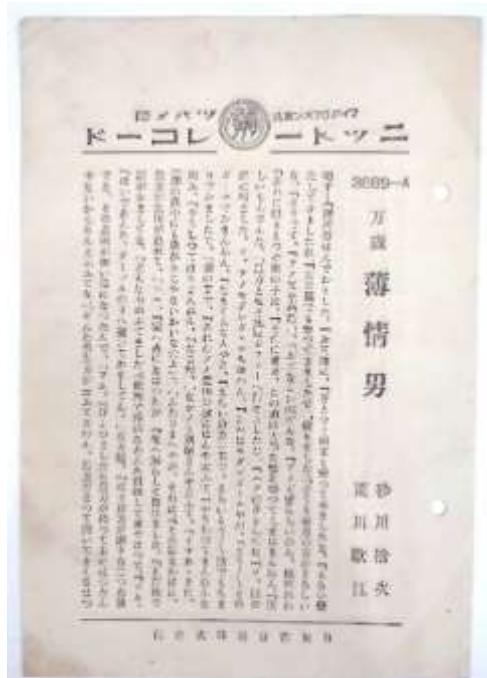
2. 【万才】

砂川捨丸・中村春代「大阪舌栗毛」

(リーガル 66286) [資料コード 00200279]

発売時期：昭和 9 年 2 月

第1回「上方演芸の殿堂入り」演者。当館所蔵の捨丸のレコードについては、当館資料整理・活用部会の大西秀紀委員による「砂川捨丸の S P レコード一府立上方演芸資料館所蔵盤について」(令和 2 年度の年報所収) を参照されたい。





3. 【萬歳】

横山エンタツ・花菱アチャコ「早慶戦」

(ニットー 6376)

[資料コード 00200238]

発売時期：昭和9年4月

第1回「上方演芸の殿堂入り」演者。現在のしゃべり漫才につながる会話だけの漫才の形を確立したといわれるエンタツ・アチャコの有名な「早慶戦」だが、表記は【萬歳】である。SPレコードのレーベルも【萬歳】となっている。

4. 【慢才】

砂川捨次・河内家芳子「何んじやかや節」

(コッカ 8077)

[資料コード 00200899]

発売時期：昭和9～10年か⁽²⁾

登録済みの歌詞カードのなかで【慢才】表記のものはこちらの資料1点のみ。レーベルは【慢歳】である。



5. 【漫歳】

立家富士・同 鶴千代「野球指南」

(エトワール 1006)

[資料コード 00201012]

発売時期：昭和10年頃か⁽³⁾

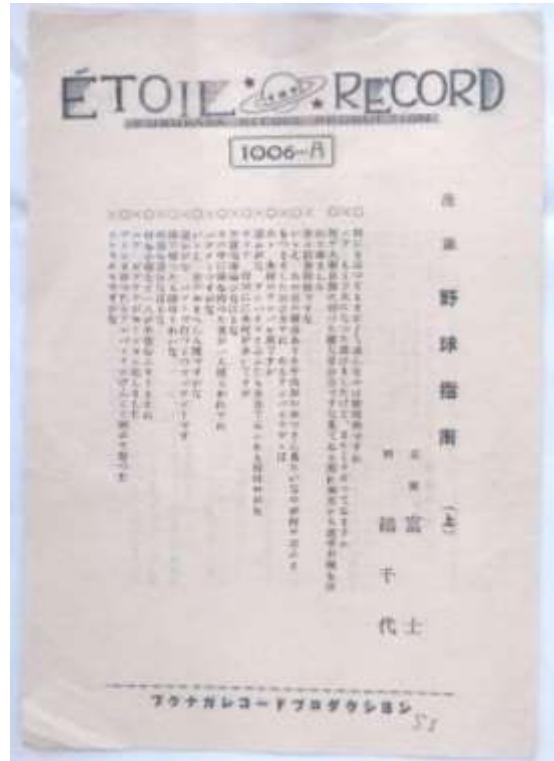
立家＝立花家か。詳細不明。

「野球指南」のレーベルには「立家富士・立家鶴千代」名義のものと「立花家富士・立花家鶴千代」名義のものとの2種類があり、当館はそれぞれのレコードを2枚ずつ所蔵している。レコ

ード番号は同じだが、「立家」のレーベルは「萬才」で右から左表記（右横書き）、「立花家」は「漫才」で左から右表記（左横書き）で、デザインも異なる⁽⁴⁾。当館所蔵の「野球指南」の歌詞カードはこちらの「立家」1点のみ。

同じコンビによる「ラヂオ体操 上・下」（エトワール 1005）も所蔵しており、レーベルは「立花家」〔資料コード 00090399〕、歌詞カードは「立家」〔資料コード 00201004〕である。表記はいずれも【漫才】。

なお、【漫歳】表記の歌詞カードは、こちらの資料のほかに三遊亭川柳・一輪亭花蝶の「亀は萬年」（コッカ 8188）〔資料コード 00201244〕を所蔵している。



6. 【漫才】

都家静代・都家文雄「ボヤキ漫才」

(テイチク 6247)

〔資料コード 00200329〕

発売時期：昭和 11 年 1 月

第 8 回「上方演芸の殿堂入り」演者。都家文雄は人生幸朗・生恵幸子の師匠。

歌詞カードの画像右下に「露の五郎」と書き込みがあるように、二代目露の五郎（のちの二代目露の五郎兵衛）から寄贈された資料である。

7. 【萬才】

ミスワカナ・玉松一郎「主人がやかましい」

(ビクター Z-37)

発売時期：昭和 13 年 10 月

第 2 回「上方演芸の殿堂入り」演者。この演目の歌詞カードは 2 種類所蔵しており、どちらも【萬才】だが、レーベルは【漫才】。

〔資料コード 00627109〕



〔資料コード 00627067〕



このように、「まんざい」には時代をまたいで複数の表記が用いられており、いちどきに「漫才」に統一されたわけではないこと、コンビの特徴によって使い分けられたわけでもないことがうかがえる。今後も資料整理を進めるなかで新しい表記の資料に出会えれば紹介したい。

【註】

- (1) 吉田留三郎『まんざい風雲録』(初版、九芸出版、1978) p245 に「彼（引用者注：捨丸のこと）の弟子に捨次というのがあって」とある。
- (2) (3)『演芸レコード発売目録（演芸資料選書4）』には掲載されておらず、大西秀紀委員にご教示いただいた。
- (4) 「野球指南」の S P レコードレーベル
左：立家富士・立家鶴千代〔資料コード 00065748〕
右：立花家富士・立花家鶴千代〔資料コード 00090068〕



上方演芸資料館（ワッハ上方）の経緯等

【経緯】

- 平成元年3月 故砂川捨丸氏の遺族から、氏が愛用された貴重な鼓を大阪府に寄贈
- 平成2年1月 貴重な資料の散逸を防ぎ、大阪が誇る文化遺産である「上方演芸の歴史」とともに後世に残していく必要があるとして、「上方演芸保存振興検討委員会」（会長：井上 宏 関西大学教授）を設置
- 平成4年3月 同委員会において「上方演芸保存振興事業基本構想」を取りまとめ、資料館の設置を提言
- 平成5年12月 大阪府において、資料館の立地場所を大阪市中央区難波千日前に決定
- 平成6年7月 基本構想を受け、大阪府において資料館に関する基本計画を策定
- 平成8年3月 大阪府立上方演芸資料館条例を公布
- 同 年 8月 3,000 を上回る一般公募の中から資料館の愛称が「ワッハ上方」に決定
- 同 年 11月 展示室、演芸ホール、演芸サロン・資料室、レッスンルームや収蔵庫等から構成される有料施設として、大阪府立上方演芸資料館がオープン
- 平成20年2月 大阪府が「財政非常事態」を宣言し、全ての事業、出資法人及び公の施設をゼロベースで見直すこととし、資料館もその対象となる
- 平成21年12月 「大阪府戦略本部会議」において、「資料館が今後も果たすべき役割は、資料の収集・保存、資料の活用（展示・ライブラリー）、レンタルサービスであり、「公演」「育成」は民に委ねる」との方針を決定
- 平成22年12月 演芸ホールを廃止
- 平成25年1月 「大阪府戦略本部会議」において、「当面は、現地において、常設展示を縮小し、より効率的な運営を行い、無料での利用に供するとともに、巡回展示や大学との連携等による研究機能の充実など新たな展開を図る」との方針を決定
- 同 年 4月 展示室・レッスンルームを廃止するとともに、入館を無料とする
- 平成26年7月 「大阪府市文化振興会議アーツカウンシル部会」が、資料館の今後の方向性について、「大阪独自の文化である上方演芸を後世に伝えていくことは大阪府の文化行政が担うべき役割の一つであり、現時点では、資料館がその仕事を果たすことが望ましい」と提言
- 平成27年4月 提言を踏まえ、資料の整理・活用を継続的かつ計画的に取り組めるよう、指定管理者による運営を改め、大阪府の直営による運営を開始
- 平成30年7月 収蔵庫を大阪府咲洲庁舎に移転
- 同 年 11月 多くの府民や観光客等が上方演芸に触れ、楽しみながら、その魅力を知ることができる「体験型」の事業を中心に企画・運営を実施するという方針に基づき、リニューアル工事に着手
- 平成31年4月 リニューアルオープン

【機能の推移】

| 場所 | 開館～ | | 平成 23 年 4 月～ (縮小) | | 平成 25 年 4 月～ (縮小・無料化) | | 平成 31 年 4 月～ (全面リニューアル) | | |
|-----|-----------------------|---------------------|-----------------------|---------------------|--------------------------|---------------------|--|---------------------|--|
| | 区分 | 面積(m ²) | 区分 | 面積(m ²) | 区分 | 面積(m ²) | 区分 | 面積(m ²) | |
| 4 階 | 展示室 | 1,170.991 | 存置 | 同 左 | 廃 止 ※ ¹ | | | | |
| | 演芸ライブラリー | 150.0 (15 ブース) | | | | | | | |
| | 小演芸場 [上方亭] (有料) | 98.44 (74 席) | | | | | | | |
| 5 階 | 演芸ホール (有料) | 1,484.34 | 廃 止 ※ ² | | | | | | |
| 6 階 | 事務室 | 326.705 | 存置 | 同左 | 廃 止 | | | | |
| 7 階 | レッスンルーム (有料) | 99.85 (60 席) | 存置 | 同左 | (改修) ※ ³ | 同左 | (改修) 常設展示エリア・ 視聴ブース (5 ブース) | 99.500 | |
| | 収蔵庫 | 260.00 | | | 存置 | 同左 | (改修) 企画展示エリア・ 演芸ステージ・ 体験エリア・ エンディング通路 (事務室含む) | 305.750 | |
| | 共用部分 | 250.093 | | | 存置 | 同左 | (改修) | 204.693 | |
| | 合 計 | 3,591.979 | | 2,107.639 | | 609.943 | | 609.943 | |

※¹ ライブラリーは、9 ブースに縮小のうえ 7 階へ移設

※² 平成 22 年 12 月に演芸ホールを廃止

※³ レッスンルーム（有料）を廃止のうえ、ライブラリー（9 ブース）及び事務室に改修

【管理運営】

| 期 間 | 管 理 運 営 | 備 考 |
|--------------------------|---------------------|--------|
| 開 館 ~平成 14 年 3 月 | (財) 大阪府文化振興財団 | 管理運営委託 |
| 平成 14 年 4 月~平成 18 年 3 月 | 大 阪 府 | 直営 |
| 平成 18 年 4 月~平成 22 年 12 月 | (N P O) ニューウエーブ日東大阪 | 指定管理 |
| 平成 23 年 1 月~平成 23 年 3 月 | 大 阪 府 | 直営（休館） |
| 平成 23 年 4 月~平成 27 年 3 月 | 吉本興業グループ | 指定管理 |
| 平成 27 年 4 月~ | 大 阪 府 | 直営 |

【歴代館長】

| 期 間 | 歴 代 館 長 名 |
|---------------|------------|
| 平成 8 年 11 月 ~ | 泊林 利男 |
| 平成 11 年 4 月 ~ | 井上 宏 |
| 平成 14 年 4 月 ~ | 有川 寛 |
| 平成 18 年 4 月 ~ | 伊東 雄三 |
| 平成 23 年 1 月 ~ | ★大阪府直営<休館> |
| 平成 23 年 4 月 ~ | 河井 泉 |
| 平成 25 年 4 月 ~ | 井上 明 |
| 平成 26 年 4 月 ~ | 田中 宏幸 |
| 平成 27 年 4 月 ~ | ★大阪府直営 |

大阪府立上方演芸資料館 令和6年度年報

編集・発行 大阪府立上方演芸資料館
〒542-0075 大阪市中央区難波千日前 12-7
Y E S ・ N A M B A ビル 7 階
TEL : 06-6631-0884
令和7年12月発行
